

ワイズメンの年齢制限

神戸クラブの定年制
戦前の国際憲法には年齢制限が
平均年齢の上昇はとまらない
若返りの方策は急務
方策:若い人の発言力を高める

2011年2月28日 東日本区1998~2011 ヒストリアン 吉田 明弘

神戸クラブの定年制

1980年に発刊された『日本ワイズメン運動史 - 半世紀の歩み -』は、日本区最初の本格的な歴史書です。そこに、初代日本区理事の奥平光さん(神戸)の、あっと目を疑う一文があります。

「私としては、ワイズメンズクラブの会員として、とどまるのは30歳以下であると考え、満30歳のときに退会した。」

1928年に国際加盟した大阪クラブは、会員資格を25歳以上としましたが、上限は決めませんでした。1930年、これに続いた神戸クラブは、上限を40歳までとしていたようです。奈良傳主事を助けて、ヘンリー・グライムズ国際書記長と頻繁な文書交換をしていた奥平さんは、国際憲法の規定も承知の上で、自らはさらに低く設定していたのでしょう。当時の神戸クラブのメンバーは、ほとんど20歳代、30歳代だったようで、後に奈良傳名誉区理事(当時)は、「若々しいクラブであったが、年齢制限のために惜しい人材を失った」と書いています。

神戸クラブに限らず、戦前は、他のクラブのメンバーも若く、1941年に国際協会からの脱退を各クラブに勧告した五十嵐丈夫第3代区理事(東京)も就任時は35歳でした。

国際憲法の年齢制限の経緯

現在、東日本区にある資料では、国際憲法の条

文の変遷はたどれません。そのため、会員の年齢制限がいつ変化したかは、分かりません。どの時点で、どうなっていたかを知るのみです。

1944年のサドバリー(カナダ)国際大会で改訂された時点の条文には、「会員は、21歳以上、YMCA主事を除く36歳以上の者は新入会員とはなれない、新クラブの場合は、36歳以上の会員は全体の20%を超過しない、新入会の場合は、36歳以上の会員の制限は全体の25%まで、免除される」と、規定しています。

それ以前は、日本区が倣ったように、入会時の年齢を40歳までと決めていたのでしょうか。

1952年のバンフ(カナダ)国際大会で改訂された時点では、「会員は、21歳以上、どのクラブも36歳以上の会員は、全体の20%を超過しない、新入会の場合は、36歳以上の会員は全体の25%まで、免除される。ただしYMCA主事には適用しない」などと、若干変更しています。

いずれにしても、ワイズメンズクラブは、会員の高年齢化を避けるために、腐心していたのでしょう。そのこともあって、米国の場合、40歳未満の会員が多いため、太平洋戦争中に、兵役、軍務に就くことになり、奉仕クラブの中で、最も打撃を受けたと記録されています。

これらの国際憲法の変更にもかかわらず、日本区は、なぜか「40歳」にこだわっていました。

1964年に、日本区が発行した文献『新しくク

ラブ作りをするには』の Q&A にこんな質疑があります。

問「もし、41 歳以上の方が、どうしても 4 分の 1 を超過する場合は、どうしても入れてはいけないのか」

答「40 歳以下の人を、さらに 3 人増加すれば、1 人の割で入れることができるわけである。それも出来ない時は、その人がクラブのため、新 YMCA 設立のため必要で、特別な資格をもつことを理由に日本区理事に承認をもとめることにより、特に入ることができる。詳しくは国際憲法第 3 条 3 項を観ること。」この例外規定によって、日本区では、YMCA の総主事や委員長などを「名誉会員」とした時期もありました。

1970 年のコペンハーゲン国際大会で改訂された時点では、会員条項からこれまでの 21 歳以上という以外の年齢制限は撤廃されました。この下限も 1973 年のキングストン（ジャマイカ）国際大会で批准された現在の国際憲法からなくなりました。

年齢制限の撤廃の影響

町内会でも、同窓会でも、年齢制限がなく、さして体力を必要としない、しかも持続性が求められる NPO では、会員や役員の平均年齢が、高い方に移動する傾向があります。東京下町の町内会では、主人が青年会、おばあちゃんが婦人会という家族も多いようです。

ワイズメンズクラブでも、年齢制限を撤廃したため、平均年齢は、緩やかに上昇を始めました。あるいは、上昇し始めたから、年齢制限を外したのかもしれませんが。しかも「年長さんが」クラブの中心を占めるようになると、新入会員も自然にその世代が増えました。社会人として実力のある人が増えて、喜ばしいことであります。

それでも、1960 年・1970 年代には、区理事に 1969 1970 年度、抱井五郎さん（38 歳東京江東） 1978 1979 年度、小谷博康さん（42 歳京都）が出て、1975 年の熱海国際大会のときには、会期

中にコメントのための「託児キャンプ」を御殿場・東山荘で併催するということもありました。今見ると、前の時代の忘れものの感があります。

1980 年代後半になって、「シルバーエイジ」、「第二の人生」などが話題になり、元気な中高年層が出現してくると、定年後の「余暇利用」、「生涯学習」としてワイズの活動が見直されるようになりまして。

1991 年 1992 年に東京山手クラブの会長を務めた奈良澄江さんは、身近のこれらの男性に対して、「あなたお友達いますか？女はたくさんもっていますよ。仕事をやめたら寂しいですよ」と入会を勧めて、成果を上げていました。

このようにして、日本のワイズメンズクラブでは、中高年層が増え、クラブの平均年齢も急激に上がってきました。ひとつの例が横浜クラブです。同クラブの、40 周年（1970 年）と 80 周年（2010 年）の記念誌で構成メンバーの年代比率を比較すると、次のようにピークが 30 歳分、右に移動しています。

年	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
1980	7%	52%	28%	3%	10%		
2010			6%	12%	41%	29%	12%

多くのクラブが同様な傾向であることは、小山正直さん（東京まちだ）のクラブ別の年齢調査統計でも明らかです。

かつては、クラブでの人間関係づくりや奉仕の経験が仕事のための勉強になる、といった面がありましたが、今は逆に、仕事の経験を生かして、余暇に人のためになれたらという人が増え、クラブによって差はあるでしょうが、雰囲気は変わってきているのではないのでしょうか。クラブのブリテンの記事に、「自己啓発」という言葉が載るクラブは活気があり、会員数が多いのは事実です。

1965 年のフレデリクトン（カナダ）国際大会は、第 41 回でした。開会式で、参加者は、司会者の言う大会参加回数に応じて、その場で起立しました。「初めての人」から始まって、2 回目、3

回目といき、だんだん立つ人が少なくなってきました。「41 回目の人！」、全員が注目する中、ひとり、すっと立ち上がりました。ワイズメンズクラブの創始者・ポール・アレキサンダーだったのです。

この話を鈴木田通夫さん（東京山手）から聞いて、かっこいいな、と思いつつ、ワイズの年齢別構成図を連想しました。構成図は、コマ型ではなく、ピラミッド型でありたいと思います。

年齢の高いメンバーがいることが、問題なのではなく、むしろ組織の継続や安定という点では良いことだと思います。若いメンバーの比率が低くなり、リーダーシップが、高年齢に移行したことが問題なのです。

高齢化が米国ワイズの衰退の原因

平均年齢が高くなっているのは日本だけではありません。

米国ワイズメンは、1968 年をピークとして、会員の減少傾向が顕著になりました。今は、さらに苦しい状況です。その原因を、故鈴木謙介さん（大阪センテニアル）、竹内敏朗さん（熱海グローリー）、奈良信さん（東京山手）らは、早くから、メンバーの高齢化であると指摘しました。谷川寛さん（大阪センテニアル）は、『アメリカ・ワイズの衰退 - その現状と要因を探る -』（1992 年）で、内的要件として高齢化とリーダーシップ不足、仲よしクラブ化を、中田靖泰さん（札幌）は『BF 代表報告『巨象のシッポ』（1994 年）でリーダーシップそのものの高齢化を挙げています。この傾向は、今も続いています。

2001 年 9 月から 1 年間、ユースインターンとしてジュネーブの国際本部に勤務した稲田奈々美さん（三島・コメット）は、地元のジュネーブクラブについて、メンバーには限りない敬愛の念を抱きながらも、「ジュネーブのワイズメンズクラブは、日本語に直すと、紛れもなく『老人会』である。次回の会合に誰が来られなくなってもおかしくないほど高齢の方が多し」と書いています。

（『ユースインターン稲田奈々美のジュネーブ便り』静岡新聞社 2002 年）

若返りが急務

国際憲法第 2 章 1 項には、（ワイズメンズクラブ国際協会）「活発な奉仕活動を通じてリーダーシップを開発し、助長、供給して、全人類の為のよりよき世界を築くべく尽力するものである」とうたっています。

このリーダーシップが、クラブの目的でもあるのです。リーダーシップは、社会に対するものであると同時に、ワイズダム内部に対してもいえることでありましょう。当然、若い世代に対する期待であります。30 歳代、40 歳代のメンバーにこそ、クラブ会長として、地域 YMCA の役員として、やがては区や国際で活躍するリーダーを目指してもらいたいと期待されています。

個人的にはサムエル・ウルマンの詩『青春』を持ち出して唱えるのも結構ですが、クラブとしては、若返りを図っていくことが急務です。区として問題を提起し、指導することは当然としても、個々のクラブも自身の存続を賭けて、取りこむ課題でありましょう。ワイズメンズクラブの活力、継続を考えると、米国の例は、対岸の火事ではありません。

若年層と高年者の相違点と問題点

前述のとおり、現在、国際協会には、会員の年齢制限に関する規定はありませんが、日本では、成人と定めています。

ワイズメンズクラブは、親睦と奉仕のクラブ活動として、ある一定の義務を果たし、一方では、会員同士の交わりを楽しむわけですから、おのずと、仕事を含む生活が、ある程度安定していることが前提になります。学校を出てすぐというのではなく、学生気分を振り切って仕事に取り組み、仕事にある程度の自信を持った時期の方が望ましいわけです。これも、若い起業家も出ており、個人差があり、一概に決められませんが、

上限については、現在は決めていません。本人が決めることになります。

問題は、ワイズの会員の年齢の幅が広く伸びていて、若い人と高齢者とは、次のような違った背景を背負っているということです。

- クラブ活動そのものに対する意識の違い
- クラブ活動に対する参加の仕方の違い
- 物事の進め方の違い
- 社会環境の変化

30歳代、40歳代とアラセブ(around seventy)では、金や時間の使い方が違うのです。

仕事のスピードも違います。昨年、横浜国際大会の準備実働委員に加えてもらいました。できるだけ40歳代、50歳代に活躍してもらいたいという当初の方針があり、これはある程度の目的は果たしました。途中で気づいたことですが、顧問格で加わった委員を除けば、私が一番「年長さん」でした。ここで何人も若い優秀な方に出会いました。能力もそうですが、痛感したのは、圧倒的なスピードでした。

アラセブの進め方は、ゆったりです。いい加減、いらいらしているのに結論が出ず、もう一度、改めて打ち合わせをすることになります。次回会議が週日の昼ということもありました。これでは、若い人が中心に関われなくなり、結果的には閉め出されることになってしまうのです。

あまり語られないことですが、社会環境の変化が、ワイズの若返りに大きく影響していると思えます。

今、日本では、完全雇用体制、終身雇用慣行が崩れ、中年者の雇用調整が行われ、日本の大企業が、一握りのエリート社員と多数のパートタイマーで構成される時代です。独立企業でも安定した取引関係が崩れ、独創性が求められ、長期の見通しが立ちにくい状況になっています。若い層は、この変化に適応していかななくてはならないのです。20年前とは異った、ワイズメンズクラブ像を描かなくてはならなくなっています。

ある組織改革の例

警告を発することは、誰にもできることです。しかし、どうしたら、どこから取り組んだら良いでしょうか。組織を変えた外部の1例をあげます。世間が狭いので、私の属している教会の事例となることをお許し願います。

私の教会は、会員70人、通常の礼拝出席45人くらいでプロテスタント教会としては中規模にあたります。

「ウチの教会には、青年会がありません」と他の教会の人に言うと、びっくりされます。「それどころか婦人会もありませんよ」と言うと、同情の眼差しに変わります。青年会、婦人会、壮年会は、日本のプロテスタント教会の伝統的な組織だからです。

それぞれがグループとして、互助、奉仕、学習、親睦を図ってきました。青年会は、学生や学校を卒業してから結婚するまで、結婚すると男性は壮年会、女性は婦人会に属するのが普通です。

私たちの教会は、それぞれが自然消滅してしまったのではなく、意識的にぶち壊したのです。

推進したのは、有職の比較的若い婦人会メンバーでした。婦人会は通常、週日の午後例会をもっていますが、職業をもつ婦人は参加できません。むしろ日曜日の午後などに集中して、能率的に事をやり遂げてしまいたいのです。青年会の方も、かつてのような、卒業、就職、結婚というライフスタイルの一方通行のパターンが崩れ、同じことを繰り返す人も出てきました。老年の方では、夫婦揃って集会に出席するなど、従来の性別、年齢別ステージの活動が意味を失いました。

これらを解散して、ゆるやかな会1本にまとめ、その中で、やりたいことをやりたい人が、やるようにしました。これは、「グループ別オールラウンド・プログラム」から、「インタレスト・プログラム」への移行でありました。

結果として、昼食会、読書会、男の手料理研究会、童謡・唱歌を歌う会、水彩画の会、小旅行の会、情報誌、ミニバザーなどが、次々と生まれ、

外部に向かう生き生きとした活動になりました。もっとも、人の営みですから、完璧な組織はありません。この方式も教会の組織としては欠点があります。どうしても、元気な者、働ける者が中心となってしまうのです(ワイズメンなら問題はないのですが)。それを補うために高齢者のグループも生まれました。

ワイズメンズクラブは、どちらかという、例会を中心としたオールラウンド・プログラムです。これに、興味・関心を軸としたインタレスト・プログラムを組み合わせることによって、若い層が活躍する場面が生まれるのでは、と思います。それが、“事業”でもいいわけです。

方策：若い人の発言力を高める

私自身に若返りの具体案があるわけではありません。やはり、時代の変化を肌で感じ、対応しなければならぬ若いメンバーこそが、自分にとって魅力あるクラブ像、社会から求められるクラブ像、納得のいくクラブ運営を思い描く主役だと思っています。ここでは、それを組織として進める足掛かりを提案したいと思います。

ともかく、全力を挙げて新会員の獲得につとめること。自分よりも1歳若い人を入れるというのもアイデアですが、年齢の制限を設けず、ワイズに馴染めそうな人を誘うこと。そうすれば、必ず、平均年齢は下がります。また、不思議なことに、若い人がいない、老人ばかりになってしまったと、皆が嘆いているときは、若い人が来ないのです。むしろ開き直って、自分たち中心で賑やかに、丁寧にやろうと割り切った時の方が、気がついたら若い層が寄ってきていたということもあります。

これは、東日本区で、かなりコンセンサスを得ていることですが、若い人で新クラブを作ること。既存のクラブに新しいコンセプトを持ち込んだり、若い人を入れるということは容易ではありませんから。

組織的に、複数のクラブの若い同年代同士の意見交換とプログラムを作り出す場を設定していくこと。ワイズメンクラブの活動の中心である例会についても、もっと多様な考えを打ち出してもらってよいと思います。

役員についてはワイズ年齢も考慮した定年制を設けること。

サッカーなどのU-18(18歳以下)といった年齢制や、シャドー・キャビネットなどの考え方を、組織や運営に取り入れて。出番を増やします。

知らず知らずのうちに、高年齢者がやりよいようになってきている物事の進め方を、見直す必要があります。

区役員に若手枠を設ける。役員は、所管する役割だけでなく、クラブのありようについて、積極的に語って欲しいと思います。

ワイズに馴染み、いろいろな役を経験してから、次の役職に就くのが望ましいのですが、合理的な「飛び級」も導入したらと思います。

これまで、ワイズメンズクラブの組織や運営に若い世代(あるいは入会間もないメンバー)が層として発言することがほとんどありませんでした。その機会も設けてもきませんでした。

10年ほど前、日本で高齢者に対する福祉が手厚くなって、一方、子どもに対するケアが手薄だった頃、ある大学教授が、冗談まじりに叫んでいました。「子どもに選挙権がないからだ。高齢者の選挙権を停止させろ」。

日本のワイズでも、意識的に若い層の発言の場を確保する必要があると思います。

あとがき

問題は、いつの時代にもありました。それをその都度、知恵を出し、力を出して解決してきました。ですから、悲観することはありません。ひと山乗り越えたところに、明るい将来があると信じています。会員の増強と、若返りは、今も昔も、ワイズメン運動の永遠の課題なのです。